演題番号25

更衣の手順をいつまでも間違えていた左片麻痺症例
- 運動主体感と動作手順の記憶に着目して -

○豊田 拓磨[1] 國友 晃[2] 加藤 大策[2] 佐々木 克尚[2,3] 沖田 かおる[1] 沖田 学[2]

1) 愛宕病院リハビリテーション部
2) 愛宕病院 脳神経センター ニューロリハビリテーション部門
3) 高知大学大学院 総合人間自然科学研究科

【はじめに】
更衣の動作手順をいつまでも間違えていた左片麻痺症例を担当した．リハビリの中では見守りでできたが，日常生活で介助を要した．これを動作手順の記憶の問題のみでなく麻痺側の運動主体感の低下が助長し動作定着が困難なことと解釈し治療介入した．その結果，日常生活の更衣が自立したため以下に報告する．

【症例紹介】
症例は橋梗塞により左片麻痺を呈した80歳台の女性である．発症4ヶ月後の高次脳機能面は注意障害や記憶障害を認めた．WAIS-Ⅲの結果で全般的に平均以下を示した．見当識や1日の時間管理は可能だが，前日の課題内容や動作手順は想起困難であった．左側の身体機能面はBr-stage上肢Ⅳ手指Ⅳ，表在・深部感覚はともに軽度鈍麻であった．運動部位の認識は単関節と複数関節ともに可能であった．WMFTの遂行時間は230.22秒，FASは37/75であった．評価的治療で知覚仮説と実際の運動の誤差を認め運動イメージの低下が疑われた．上肢操作時の内省は「腕が重たい」と発言した．更衣は全介助を要し，「右側からの方が通しやすい」と幾度も非麻痺側から通していた．言語教示により修正できたが定着しなかった．

【病態解釈】
本症例の運動イメージ能力の低下や上肢操作時の内省から運動主体感の低下と捉え，それが更衣で非麻痺側から通す要因に繋がっていた．さらに，記憶の低下や全般的知能の低下から動作定着を阻害していると解釈した．

【治療介入】
認知運動課題は左上肢のリーチ動作を中心に行った．閉眼で他動的なリーチ動作の認識を行い，その体性感覚情報を基に自動介助運動および自動運動を行った．その直後に開眼にて運動イメージと実動作の差異を比較照合した．更衣練習では紙面で文字提示を行い，動作を反復し動作手順の定着を図った．

【結果】
介入2カ月後の変化はWMFTの遂行時間が89.34秒，FASは53/75と改善した．上肢操作時の内省は「手が伸ばしやすくなった」「いろいろ左手を使えるようになった」と発言した．更衣動作は自立となった．

【考察】
左の身体性の構築により運動主体感が獲得され，更衣時に非麻痺側から通すことなく左上肢の行為への参加が円滑に行えた．加えて，文字提示による反復練習をした結果，動作手順を間違えずに更衣が自立したと考えた．

【倫理的配慮（説明と同意）】
発表に際し本人に説明し同意を得た．